

文楽の男

吉田 玉男〔聞き手:山川 静夫〕

山川 皆さんこんにちは、山川静夫でございます。

私が何でこうして舞台に出てきたのかということでご説明申し上げますと、そもそも玉男師匠の人形遣いになる動機が、しゃべるのが苦手ということなんだそうです。人形遣いはしゃべる必要がない、そこでこの仕事を選ばれたということで、私がインタビュー形式で参加させていただくわけです。師匠、しゃべるのが苦手なのは本当でございますね。

玉男 そうです。とにかくしゃべることは苦手のほうでしたんで。それで音痴ですよ。案外、三味線の間(ま)なんかでも覚えるのが私は暇かかりますわね。それだから中途半端ですわ。

山川 とにかくこの会場は大阪の文楽劇場とは様子がちょっと違います。ここは1,800人入るそうですよ。ですから、空席もちょっと見えますが超満員という大変なお客さんでいらっしやいます。

さて、どんなお話から伺おうかと思うのですが、師匠は阪神タイガースの大ファンですね。

玉男 今のところね。(笑声)私は大体、南海ホークスのファンですねん。(拍手)それで今はもう阪神タイガースですね。ダイエーホークスになってますけど、ホークスは前の南海ホークスのほうです。

山川 そうですか。日本シリーズは、ダイエーと阪神が対戦しましたね。

玉男 そうですね。

山川 困りますね。

玉男 困りますね。何でダイエーがホークスになってるんだと思いますね。

山川 南海ホークスのほうがよかったですか。

玉男 南海ホークスのほうがよかったですね。ホークスらしいね。

山川 ホークスらしい。そうですか。

玉男 鷹(たか)でしょう。鷹を英語でいうとホークスやね。

山川 とにかく玉男師匠は野球ファンでいらして、私がお宅へお邪魔するとスリッパにタイガースの模様がちゃんとあるんですよ。

玉男 ああ、スリッパね。うちへ来られた頃はずっとタイガースのスリッパを履いてました。サンダルや。スリッパやなしにサンダルを履いてました。(笑声)

山川 サンダルなんですね。

まずちょっと芸のお話をうかがいたと思います。芸道というものが非常に長い道のりを持っているということですが、文楽の人形遣いになった動機は、しゃべるのが苦手だったということのほかにもまだありますよね。

玉男 そうですね。私は学校を出てから1年間、会社の給仕をしていました。そこは工業的な会社でしたから、工業大学を出てきた方で、その方は後にその社長にもなれますね。大学を出た人はやっぱり優秀な仕事をします。来て2カ月か3カ月目に社長の代わりをして、代わりに東京へ出張したり、いろいろ任されて、ええ仕事をしますわ。

ところが、会社へ入って1年ほどして見回すと、給仕上がりはあんまりええ仕事をしてませんねん。用度か何か、そういう係の下っ端をやらされたりね。それで、これはやっぱり夜学ではいかなあと思って、夜学で何ぼ勉強してもあかんわ、こんな会社におってもというので、フワフワやめる気になっていたところを、近所に、玉幸さん、後の玉助さんの奥さんが私の母と仲がよかったんで、「そなんやったら文楽へ入れたらどないやの」というようなことで。文楽なんて見たこともなかったんです。近所に紋十郎さん(桐竹紋十郎)もおられたし、玉徳さん、後の辰五郎さん(吉田辰五郎)ですね。こういう方とか、後の栄三(吉田栄三)になられた人もおったです。まあ、人形遣い村というか人形遣いのたくさん集まっている町でしたね。

それでその世話で、文楽をいっぺん見に行くのやったらということになりました。私は浪人という日が1日もなかった。学校を出てすぐ職業紹介所へ自分で行って履歴書を出して、そして会社へすぐ入った。会社へ行っても、次の仕事にかわるまでの間は休まずに、日曜ごとに文楽を見に行っていました。今のように土曜日は休みでないから。そして3回ほど見に行きましたかな。そしたら、後の勘十郎さん(桐竹勘十郎)が私に一番近い先輩ですねんけど、同じような年頃のが皆、「おまえ、人形遣いになるのか」言うて歓迎してるような感じでね。あれらがみんな人形遣いになつとるのやったらやれるやろというようなもので、これはやってみよう。人形遣いはしゃべらないで済むから。太夫、三味線の人—三味線もあまりしゃべりませんが、これは技術が要るし、子供の時から稽古しとかないかんのですが、「人形遣いは足遣いからやるねん」ということで、これはしゃべらないで済む人形遣いがええとなったわけです。

おしゃべりするのが嫌やけど、本当は警察官とかそなんんになりたかったんです。と

ころが、これはええ仕事やと思って、それで入ることになったんです。

山川 なるほど。それで最初に入門しますと、どんなことから仕事が始まるのですか。

玉男 まず、「足遣い」と言うんですが、初めは「足持ち」ですな。

山川 足持ち。

玉男 はい。人形の足を持って歩くんですね。歩いてとまる、とまったら座る、座ったらそのまま20分間ぐらいじいっとしてらんです。足持ちです。

山川 20分もですか。

玉男 そうですねん。人形遣いが右におって、足遣いは一番真ん中におって人形の足を持ってるんです。それで、座った足を持たされて、そのままの姿勢で20分間おるといことね。これはまるで足を持っているだけで、足遣いやないねん。足遣いというたら舞台をいろいろ三味線に合わして間を踏んだりするのが足遣いやけど。まず1年半ぐらい足を持たされますな。

山川 大変ですよね。

玉男 大変ですねん。

山川 そういのを玉男さんは我慢できましたか。

玉男 しました。

山川 逃げて帰りたいと思ったことはありませんか。

玉男 いやいや、逃げて帰る言うても、そんなことはできませんし、休業やなと思って持っていました。

山川 これは今の人でもそうですか。

玉男 今でもそうです。まず動かん足から。あまり動かない、活躍しない人形の足を持たされるのが一番最初なんですね。それから、ちょっと器用だったら2年目ぐらいには足を遣えるようになりますね。この動く足を遣うようになるともうしめたもので、やっけてもちよっと楽しみが出てくるんです。その足持ちの間、義太夫が初めは何を言うてるやらわからへんけど、自然とそれがわかってくるようになるのも足遣いを2年ほどしてからやね。

山川 なるほどね。よく、足遣い10年、左遣い10年、そして主遣い(おもづかい)が10年で一人前の人形遣いになると言いますね。

玉男 そうそう。

山川 その前に1年半から2年の足持ちというのがあって、これに耐えなきゃだめだと。

玉男 それに耐えなきゃだめなんです。

山川 大変なことですね。

玉男 ええ。そやから今は研修制度があつて、研修生はもう足遣いにしてしまいますね。研修するのは足遣いから修業さすようなものです。

山川 なるほど。そうすると昔と修業の段階が飛ぶわけですね。

玉男 そうです。ところが、研修生は足遣いをやってきて、足遣いの研修を済ませてきているのに、本番の文楽へ入ると当分は足持ちですねん。本職になると当分は足持ちです。この間に嫌気さすのがちょいちょいあるんです。

山川 ちょいちょい、玉男師匠もそうですか。

玉男 いやいや、僕は研修制度やなしに、初めから足持ちやから。研修生は入るなり足を動かすことから教えますよってな。毎日足をじいっと持ってるだけではついてこないですわ。

山川 ああ、今はね。

玉男 はい。足持ちが、その研修生からやめてしまいよるんですね。

山川 ここにお園の人形があります。今月は大阪の文楽劇場で公演中ですから、これは、公演で使わない人形で「艶容女舞衣(はですがたおんなまいぎぬ)」の酒屋の段のお園の人形です。大体、玉男師匠は立役の人形をお遣いになられるので、ほとんどこういう人形は今のところお遣いにならないんですね。

玉男 そうですね。

山川 今日は人形をちょっと遣っていただくというのが、サービスでございまして。(拍手)

玉男 サービスって、一人遣いやないんやから、一人遣いでは本当は遣えないんです。人形遣いは3人で遣うのやからね。

山川 そうです。(笑声) そうなんですが、せつかくですからちょっと持っていただくわけにはいきませんか。

玉男 人形というのは大体、自分の遣う人形は自分で衣裳づけするんですよ。この人形がこのまま倉庫にあるというもんじゃなしに、初め人形に棒襟(ぼうえり)という襟をつけてまして、そしてその上へ衣裳を着せていくのですね。衣裳を着せて、急所急所を糸でとめていく。四筋がけの糸、布団針の太い針に2本の糸を通して四筋にするんですね。2本をいっぺんに通して、普通の糸でしたら結んだら2本になりますね。ところが、これは四筋がけの糸で、急所急所をとめていくんです。襟は5カ所ぐらいにとめて、その上へ衣裳を着せていきます。そして前を合わせて、それからその上へまた帯を着せていくというようにして。

山川 師匠、そして、左手でかしらの胴串(どぐし)を持っていますね。

玉男 左手で胴串を持っていますね。

山川 そして右手でもって人形の右手を。

玉男 右手を遣う。これが主遣いです。

山川 左遣いは左手を遣うわけですね。

玉男 そして、足遣いが真ん中にあるんです。

山川 女性の人形は足がありません。足がありませんから、裾を使ってくっくっくつと歩くような格好でやる。これを「ふき」と言いますがコツがあるんですね。

玉男 そうです。それで、女の足遣いから稽古をするんです。

女形の足はつりませんので、裾でつまみというのをつくるんです。糸で急所2つをとめて、この足をさばくつまみをつくって歩いているように見せる。昔の人の裾を引きずった着物がありますね。そういうつもりで、左、右と。立役は右から歩きますが、まあ、大体女形は左から歩くんです。そして握りこぶしをつくって着物をかぶせると、膝があるように見える。適当な高さのところ遣うと女形は足があるように見えますね。

山川 次に胴串をちょっと持っていていただけますでしょうか。

玉男 かしらには鯨のひげを使っています。バネです。昔は今のようなバネがありませんから、鯨のひげを削ったのをバネにしてあるんです。そして人形にはいろいろなかしらがあつて、目が右に向いたり左へ向いたりするのは皆全部そのバネでやっていますのやね。うなずきもできます。やっぱりまったりとしてます。戦後に鯨が取れなくなった時には普通のバネでやったことがあるんですが、短時間しかもたないですね。すぐバネが効かんようになります。

山川 師匠、これは口に針があるのですね。針で手ぬぐいをかむのですよね。

玉男 はい。手ぬぐいでもくわえさせてひっぱると食いしばってるように見える。そしてそれをすぐ外すと引っかけたのがわかりますから、泣きもってさりげなく針から外すんです。泣きながら涙をふいて外す。これは袖でもできるんです。

山川 ああ、袖でも。

玉男 袖で泣いて、かあつと泣いたあと涙を拭きもってするとかね。こうして食いしばって。

山川 この小さな針が実は非常に効いているということですね。

玉男 はい。

山川 どうもありがとうございました。

玉男 海外へ行くと、外国の人は可愛かったというのでここへチューをしに来るんです。そしたら痛い痛い言うて。(笑声)そんなんやったですね。

山川 文楽の女には針があると。(笑声)

玉男 そうそう、よう知ってるね、ええ言葉を。

山川 ありがとうございます。玉男師匠の奥さんはそんなことはありませんよね。

玉男 針はありません。(笑声)

山川 どうもありがとうございました。ちょっと人形を遣っていただいたのですが、今度は左をお願いします。

玉男 左ですね。左遣いになるともう人形遣いはしめたものですね。

(玉男師が差し金を持ちながら左遣いの実演を行った。)

山川 わかりました。ありがとうございました。

本当は人形遣いが3人いらっしゃるといいのですが、興行中は人間が足りないんです。1体の人形に3人かかる。そしてそれが何回も何回も舞台に出てくると、人がとても足りないんですね。ですから、この文楽が盛んになるためには文楽に入る人間を増やすということです。

玉男 そうです。

山川 これをぜひ稲盛財団に後援していただいてやっていただきたいと思うわけでございますよ。どうぞお掛けくださいませ。お疲れさまでございました。

師匠は今立役をお遣いになっていますが、一度、昭和50年ぐらいの時、相当女形を遣いましたね。

玉男 女形をね。みんな地方巡業や海外公演に行くのにね、私は外国へ行くのは嫌や言うてあれは昭和50年の、私は56の時です。その頃に女形遣いさんが全部行ってしもうたんです。結局、私に女形が回ってきまして、亡くなった越路大夫さんが昼は「先代萩」の政岡で、夜は「艶容女舞衣」の三勝半七の酒屋を一段語っておられます。そして、その時に私はこのお園を遣ったことがあります。政岡を遣って、夜はお園を遣う。それで、「阿古屋(あこや)」と続いたわけです。

山川 三つやりましたものね。

玉男 三つとも女形、まるで女形遣いでんね。その時分に今の文吾君が「壺坂」のお里を遣っています。これも男遣いですねんけど。

山川 大体人が足りない時には、いつも立役を遣っている人も女を遣わなきゃいけない。だから修業は全般的にやっぴいなきゃいけないということですね。

玉男 そうですね。私は、お園はさわりのところなんかはしよっちゅうその時分でも遣っ

てましたけどね。お座敷で遣ったり、いろいろしてますんやけど。

山川 これは簑助さんが得意にしていますね。

玉男 そうそう。

山川 それで、人形には表情がありません。そこで人形遣いが表情を出すことを要求されるわけですが、どういうふうにしたら出るのでしょうか。人間だったら顔が変わりますよね。

玉男 それはかしの動きですね。かしのちょっとした微妙な動きでいろんな表現ができるんですね。それも品よくやるのと、いけずっぽくやるのと、いろいろありますからね。そやから、その人の持ち前ですね。役を表現するということはその人の持ち前で、気は心というか、何か自然に出てくるんですね。

山川 そうですねえ。大体、人形を持たせると動きたくなる、動かせたくなるんですね。

玉男 そうそう。

山川 それを抑えるというのはなかなか難しいことだったでしょう。

玉男 そうですね。そら、私らは若い時分には辛抱立役(しんぼうたちやく)というので、長い間持たされました。

山川 ということは。

玉男 辛抱するんです。あまり動きがないのでじいっとしとかないかんというね。まあ殿さん役もやりました。殿さん役もあらゆる殿さんの役をやりましたな。「堀川猿回し」の伝兵衛。それとか二枚目では「お半長右衛門」の長右衛門、これも若い時から遣ってます。辛抱立役ですな。

山川 「お半長右衛門」というのは、ものすごいおぼこい女の子と年寄りの…。

玉男 40に近い長右衛門と13〜14の少女との恋物語ですな。

山川 だけど、最後には心中するわけなんですね。

玉男 そうそう、桂川でね。

山川 身を投げてね。それが辛抱立役ですか。

玉男 辛抱立役ですな。じっとしてますな。

山川 あまりにも悪いことをしちゃったものだから、それでじいっと。

玉男 「帯屋の段」でほんとに動きが少ないんです。最後にちょっと情がこみあげて狂いみたいなことになるところはありますけどね、それ以外じいっとしてる役なんです。

山川 それから、位が高い役、例えば天神さんが近いのですが、天神さんに祭られている菅原道真、「菅承相(かんしょうじょう)」。この菅承相の役は玉男さんの非常に大役であり当たり役です。この品格というものは玉男さんならではと思いますが、動かないと

いうことがなかなか大事なのですね。

玉男 そうですね。こんなんは教えても教え切れん人形の役ですねん。これは先輩の、私らの時は初代の吉田栄三(えいざ)さんが遣っておられたんです。この方はもちろん座頭ですけど、その方の足を遣ってる。ただ足を遣って、また左を遣ってくれば大体その役の性根がわかってくるんですけどね。私はちょうどその方が遣っておられる時分には、やっと足持ちから足遣いになったところの時代でした。その時分に私は軍隊に取られましたから。ちょうど兵役の時でした。その頃に見ていたイメージだけで私は持っていますねん。

山川 そうですか。

玉男 それで、栄三師匠ならここらこうするやろなというイメージだけで遣ってるということですね。その時分、足も遣ってたら、もう体にくっついて、足を遣っている時にはその人の振りがちゃんと腹に入ってこんことにはいけないんですわ。

山川 つまり、いい技芸者というのは、たとえ足を遣っていても主遣い、主役の人形遣いの呼吸なり間なり、そういうものを体で感じて、よく観察してるということですね。

玉男 そうそう、体で覚えていくんですから。字引に書いたようなものを読んで、そんなんでは覚えられませんのでね。とにかく体で覚えていくんですよ。足遣いから左遣いですね。左遣いになったらいつでもこの代役ができるような技量がなければいけません。

山川 たとえ足遣いでも左遣いでも、主遣いの人たちの素晴らしい芸というものを観察して、それを体得していくことが大事だということですね。

玉男 そうですね。

山川 そうすると、玉男師匠の場合には素晴らしい吉田栄三という師匠がいたんです。師匠って、教えてもらえたわけじゃないんですが。

玉男 ええ。私の師匠の吉田玉次郎という方と仲のよかった栄三師です。栄三師のほうがちょっと兄貴ですけどね。初代栄三師はね。その人と仲がよかったので、私はその人の足を遣わせてくれるようになったのは兵役に行く3年前からです。3年前から3年間、初代栄三さんの足を遣ったということです。それが後々に身につけてきましたな。

それから3年2カ月ほど兵役にずうっと行っていましたからね。その間文楽を抜けていました。そしたらその間に玉次郎師匠は亡くなるし、栄三師匠は帰ってきたらまだ元気やったけれども、もう大分弱っておられたですね。それから、その時分に私を文楽に世話してくれた玉幸さん、その人が玉助になって、座頭のような役を遣っておられたんで、その人の左を私が遣うようになったんです。そやから、足遣い10年というけど、私は足遣いを7年で卒業したことになります。

山川 優秀だったのですね。

玉男 優秀でもないですけど、そないなってしまったのですね。それで兵役から帰ってくるともう左遣いの稽古をせえってね。次の私の師匠は人形頭取でいろんなことを、左とか足遣いを決める役目です。その役目の人が亡くなったんです。私は一人弟子ですから私の兄弟子ではないんですけど、私の師匠の世話をして、いろいろ用事をしたり小用事をしてた玉市さんという人が人形頭取になっておりまして、その人が私に左遣いになれいうて、左遣いを教わったのです。

山川 たとえものすごい素晴らしい先輩や師匠がいても、個性が違うものですから、弟子がまねをしようと思ってもなかなかまねができないということが教える過程でありましよう。

玉男 はい、ありますね。

山川 その時はどういふふうにするのでしょうか。個性が違いますからいくらまねしても追いつかないという場合がありますよね。

玉男 それはもう教えても仕方がないね。(笑声)それは、やっぱり「好きこそ物の上手なれ」で、その気になってやらんことには絶対上達しませんから。その気になるというまですかにいかんことには、何でもついてたらええわではいかんからね。左遣いという格になると、いつでも来い、いつでも来いよというふうに、代役がいつでもできるような気持ちで遣いながら見てなんだからだめですね。

山川 そうですか。

玉男 私がこうやったら、この役の左をこう遣ったらこれでええねんなど、それではいかんということですか。遣うだけやなしに、これなら自分はこうしようとかね。まあ主遣いになる人は別に神様でもないんやから、その人にも間違いがあるのやから、その人の欠点も考えたり、「ああ、この人はこんなことしてるけど、わしが遣う時にはこうしてやらんといかん」というようなことも自分で研究しながらやらんことには。

山川 そうですね。まず忍耐が大事だということ、そしてやる気になるということ、そして、いつも研究熱心であるということで師匠の今日があるのでしょうか、いっかな師匠でもやはり文楽の修業は厳しかったでしょうから、嫌なこともあったでしょう。逃げて帰ったことはありますか。

玉男 逃げて帰ったことも2回ほどあります。(笑声)

山川 どういう時に逃げて帰ってきたのですか。

玉男 それは一つは玉次郎師匠の足を遣ってたんです。

もうその頃、私が玉次郎師匠の弟子になった時から師匠は足が弱かったんです。神

神経痛もしょっちゅう起こすしね。神経痛で痛い痛い言うて。雨降りの日は神経痛がきつくなるらしいんです。それで足はよぼよぼですし、廊下をだれかが物を取りに行くのに走ってたら、「こらあ、危ないがな」言うて壁にへばり着いて、「そんなに走るな」と言うような人で、足がよぼよぼでしてん。

その人の人形を旅先で足を遣ったんです。「新口村(にのくちむら)」の孫右衛門というおじいさんの足を。そして、舞台上で二重になるでしょう。そのあと船底へ降りる。舞台上駄を履いて降りしなに師匠が転んで、ばっとこけかけたのを止めなんだというので怒られたんです。足遣いは主遣いがこけるところを、カーッと人形と一緒に腰を持ったり肩を支えるとか、何かせないかんのですけど、そんな間があれしまへんねん。

山川 そら、ありませんわ。

玉男 ずうっと下がってきたなと思ったら、こけてまんのや。(笑声)

山川 それが足遣いの責任になったのですね。

玉男 はい、足遣いの責任になりますねん。主遣いがこけたら足を遣っている者が下手やからこけるねんと。

山川 なるほど、そうですか。

玉男 それで、すぐ師匠は運ばれて宿へ帰りますやろ。旅先で九州の中津川というところでした。それで僕は帰ったらすぐ見舞いに部屋へ行って、そばにじいっとついてますやろ。そしたら芝居がはねて皆どンドン見舞いに来ますねん。「師匠、どないですか」言うて。「うん、しゃあないわ。足遣いがこれやからなあ」何もかも足遣いの責任。同じことを皆に言うねやもん。「足遣いがこれやからなあ」言うて。(笑声)

山川 それで、さすがの玉男さんも…。

玉男 嫌で、もう明日帰つたろうと思って。

山川 帰ったのですか。

玉男 帰らなかったです。「帰ったらあかん」て兄弟子格の玉市さんや皆に言われましてね。それで帰るのをやめましたけど。

山川 でも、つらいですよ。

玉男 そうですよ。もう帰つたろうと思ったこともあります。

山川 幹部というのは非常に勝手なことを言いますが、無理難題を言ってもそれに耐えるということですよ。

玉男 そうです。

山川 とにかく大変な修業ですが、浄瑠璃を聞いて、義太夫を聞いて玉男さんたちは動くわけですね。

玉男 そうです、そうです。

山川 そうすると浄瑠璃が、義太夫がいいか悪いかというのも重要なことになりますよね。

玉男 そうですね。人形遣いは太夫次第ですね。それは昔から文五郎さんでも言うてましたな。太夫の若い人によく「しっかりやってや。しっかりやってもらわなったら、人形はあんたら太夫次第やねんで」と言うてました。人形遣いのええのをつくろうと思ったらええ太夫が生まれてこななったらあかんねん、としょっちゅう言うてました。

山川 いい浄瑠璃はまた三味線という、相三味線がありますが、コンビを組む三味線にも影響がありますからね。

玉男 そうなんです。

山川 つまり、三味線と太夫と人形が三位一体となっていていい芸を見せるということですね。

玉男 そうそう。それやから割合と足を遣っている、熟練してきた足遣いになると、義太夫の良し悪しがわかってくるんです。大体、自分と同年輩の人よりもう一つ先の名人の芸、義太夫が耳に入ってるのでね。私らと同年輩の人の義太夫ではちょっと頼りないなと思うようなことがよくあったな。その上の上の人の義太夫を聞いている感じが耳にあるんでね。だから同年輩の人が文楽の太夫の一番大将になっていても、物足らんなあというようなところが往々にあったね。「自分で語れ」と言われたらよう語らんのやけども、義太夫は何となくその時代のこの節回しは違う、これよりあれのがよかったというのは感じますな。

山川 今回、文楽が世界遺産に指定されまして、本当におめでたいことだったと思うのですが。

玉男 ええ、ありがとう。

山川 本当におめでとうございました。その世界遺産は三味線、太夫、そして人形と、3つが総合的にもらったわけですね。

玉男 そうですね。

山川 これは強化しなければなりませんね。

玉男 そうですね。三位一体ですからね。段取りでもね。人形は独立して公演はできませんねん。太夫の場合は素語りというものもあるわね。素浄瑠璃で公演は成り立つけど、人形遣いだけは語ってもらう人がいないと。浪花節でもやれるやないかと言うけど、そんなんではピンとこんし。そらやっばり義太夫とピタッと合うたもんやからね。というて人形だけで芝居せえいうてほうり出されたら、人形だけではどないもでけへんです。自分

で語ってというようなことはでけへんです。

山川 さて、非常に難しい問題になります。後進の指導ということになりますが、今の若い人はよくプツンするとかキレるといいますが、辛抱がちょっと足りないのではないかとということが世間で言われております。文楽の世界ではいかがでございましょうか。若い人を指導する時に、ここはもうちょっと辛抱しないとということはあるですか。

玉男 昔の人形遣いはどこかに皆傷があつて、蹴られたり舞台上で持っているものでパンと殴ったり、昔の強硬的な指導とかね。いろいろ荒療治されたらしいですね。私が入った頃には文楽座はちょっと紳士的になっていましたからそういう乱暴なことはしなかったですけど、そんな教育は今はしませんからね。自分で困ったことがあつたら教わりに来たら教えますけど、今文楽に入っている若い人は割合と、教えてもできんことが多いんです。

山川 それはどうしてですか。

玉男 舞台は真剣勝負ですからね。その場で教えんならんことですが、一々教えられんこともありますねん。舞台と語りがあつて、そこで間拍子があつて、そしてそこで教えるというんやったらええけどね。今はテープレコーダーもあつたりして、繰り返しやったらそれはできんことはないですけどね。そやから、人形を持って一々こうやああや言うて教えることもないし、そして教えるというのは大体足遣いに教えることが多いですね。足遣いを。

山川 それが基本になるわけですね。

玉男 基本になる足ね。

山川 足遣いをしている時に観察している人が勝ちなのですよ。いろいろ見て。

玉男 そうそう、足遣いの間に自分で納得するように覚え込んどかないかん。自然に。

山川 楽屋で休んでいたらいけないのですね。

玉男 そうそう。楽屋で座布団を温めているようなことではいかんということや。

山川 何か役を見つけて舞台上に出てどンドン働く。

玉男 そうです。

山川 文楽ではよく手伝いのことを「てったい」と言うのですよね。

玉男 人形の左とか足を遣うことを「てったい」と言うんです。

山川 そうですか。もうとにかく自分で進んで「てったい」をやるんですね。

玉男 そうそう。足遣いをね。そやからみんな昔はよく足遣いに志願をして、「足を遣わしてください」って言って頼みに行くことがあつたんです。私は初代栄三さんの足を、「熊谷陣屋」の物語の足を遣いたくなくて、それで熊谷の人形が出る順になったら師

匠の顔を見て、人形の足を見て、遣わしてくれへんかいなというような顔をして大分モーションをかけたんですけどね。

山川 口には出さないけれども、目でもってやらしてくれ、やらしてくれと。

玉男 しまい、舞台の前をずうっと這うていって、足遣いを隠すための手すりを這うていって、舞台上で物語の前でこうして見たり、這うていって横になって見たりしてね。そして催促しているような形を見せたんです。そしたら「おまえ、いつも見てるねんな。それならいっぺん遣うか」と言われて、それで遣わせてもろたことがあるんです。

山川 楽屋にいたら師匠にもわかってもらえないのでできませんよね。だけど、下からこうして眺めて、やりたいな、やりたいなと思っていると、「やるか」ときますからね。

玉男 そうそう。その時分に遣っていたのが栄三師の弟子の足遣いの名人栄三郎さんといって、私より11も年が上ですねん。それでも足を遣ってたんやからね。その人は「おまえから言え」言うてね。それでも「師匠、玉男が足を遣いたいと言うてまっせ」とよう言わんねん。それはちよつと言にくいところがあります。栄三郎さんも怖いから、「おまえから言え、頼め」って。自分もええかげんに足をやめたいからね。(笑声) 栄三郎さんは足はうまかったですよ。「勸進帳」の弁慶の足なんか遣うてね。

山川 とにかく栄三郎さんは大変な人形遣いで、若くして亡くなられましたね。

玉男 そうそう、38で亡くなりました。

山川 惜しい人でしたが、兄貴として慕っていた人ですね。

玉男 そうです。

山川 玉男さん、時間がだんだんなくなってきましたが、玉男さんのお話を聞いておとし出した本のことを少しお話したいと思います。

『文楽の男』という本を書いたのですが、その時に玉男さんは「やっぱりおれは要領がよかった」とおっしゃった。

玉男 そう言うたかな。

山川 要領というのは、よく考えれば「ずるい」と受け取られたりしますが、私はそうではなかったと思うのです。要領がいいとは、むだなことをやらない。

玉男 そう、それはあつたね。むだは嫌いやったな。むだなことはしませんな。

山川 そういことです。ですから、ひとつのものにずっと収斂していって究める。それにはむだなことがあってはいけないということで、要領がいいと表現されたのではないかと私は思ったのです。

玉男 そうですね。そんなに要領のええほうじゃないけど、それはその通りですね。

山川 これからの文楽はどうなると思いますか。

玉男 「洩(はな)垂れも次第送り」というセリフがおますやろ。

山川 はい、「洩垂れも次第送り」ですね。

玉男 次第送り。私は洩垂れやったけど、やっぱり長生きしてるよってにだんだんと次第送りになったんやからね。

山川 なるほど。

玉男 次第送りで、もう人形遣いの一番古老になったけどね。

山川 そうですね。アナウンサーと一緒にですね。

玉男 だから順番に偉い人が出てきますわいな。そんなに心配したことないと思います。その時代、時代に応じた工夫で、その時代、時代に応じた人物で、皆やってくれると思います。跡継ぎはね。

山川 例えば、歌舞伎に六代目中村歌右衛門という方がいて、その人が非常に怖いイメージがあって、歌舞伎俳優がみんな歌右衛門を尊敬し畏敬し、まるで歌右衛門が籬(たが)のような役目をしていたのです。ところが、六代目歌右衛門が亡くなるとばらばらになって、統率がとれなくなってしまう。みんな勝手なことをやり出すということで。これは困るわけです。

私はとにかく玉男さんにいつまでも籬になってもらいたいと思うのですよ。桶の籬がなければ板切れですから、ばらばらですよ。ですから、健康には十分留意されて、きょうは本当にお元気なお姿とお声を聞けて、そして面白いお話で嬉しかったです。

玉男 ああ、どうも恐れ入ります。

山川 ありがとうございます。何か決意表明をひとつお願いします。

玉男 決意表明、それは何というても、もう年が年で、私は文五郎さんのことを思ったらまだ若いつもりだんねんけどな。文五郎さんも、世情と一緒に女形遣いのほうが長命です。文楽でも女形遣いは割に楽です。人形もね。そやけど、この間も「知盛」を遣うてましたけど、17キロもあるんです。

山川 17キロを左手で支えているんですよ。

玉男 あれ、大分こたえましたな。

山川 大変ですね。

玉男 それだから、やっぱりもう年が年で、あきまへんな。(笑声)

山川 これから女形に転向したらいいですよ。

玉男 女形にね、今から転向できたらよろしいけど、女形遣いがまたようけできてまんねん。

山川 そうですね。きょうは本当に聞き手が拙かったので皆さんにおわかりいただけな

い部分もあったと思いますが、玉男さんがお元気な姿で、こうして講演会に出てくださったということで本当に私は嬉しいです。皆様、いかがだったでしょうか。(拍手)

どうもありがとうございます。

玉男 どうも皆さんありがとうございました。